

「教育的関係」再考

— E. フロムの〈自由からの逃走〉という概念を中心に—

鬢 櫛 久美子

はじめに

教育の現場には、「いじめ」「校内暴力」「不登校」「少年犯罪」「学級崩壊」など多種多様な「教育問題」が起きている。このような問題は今では、原因を教育の外に探すのではなく、教育そのもののありように疑問の声を投げかけ、問い直しを迫っている。学校化社会においては、教育は学校教育と同等に捉えられているために、教育への批判は即学校教育についての厳しい批判の形をとって現れるのが常である。「学校教育は危機に瀕している」という声や、「我が国の学校は社会制度としての寿命（耐用年限）を終えつつある」という議論もある。⁽¹⁾ 教育に携わるものとして、危機に瀕しているのであれば突破口を見出すべく努力をせねばならないし、寿命を終え死を迎えるというならば、再生の道を探るのが責任というものであろう。

「教育問題」が、教育学に問題を投げかけて久しいにも関わらず、問題の核心が見えてこないのはなぜか。いろいろな議論がなされているにも関わらず、「教育問題」は解決するどころか、さまざまな様相を呈し複雑化する一方である。これまでの議論に欠けている視座は何かを考えてみたい。

これまでの「教育問題」に関する議論は、原因を「管理と選別の学校教育と、それに飲み込まれた教師や親達の責任」に帰するものと、「こうしたケースを特殊で異常なケースとして精神医学の治療の対象として処理しようとする」議論の2つに分けられるようである。⁽²⁾ 子どもを除く大人の問題として議論したり、特別な子どもの問題として議論しているのであるが、果たして十分といえるであろうか。そこで、大人と子どもの関係の問題として問いを立てることを試みる。つまり、1点目は、教育的関係論の視点から、教育を問い直すことを主張したい。

2点目は、教育が本来良さを求めるものであるために、人間の否定的側面から目をそらし、人間関係からなる教育的営みのプロセスに生ずる否定的な側面や、教育的関係を阻害

するものごとを見つめることをおろそかにしてきたことを反省しなければならないと考える。この2点が、これまでの議論に欠けていた点として、これからの議論のポイントである。

教育者と被教育者の関係を異世代間の相互形成として捉えたときに、相互形成をするためには、生き生きとした〈かかわり合い〉がなくてはならない。⁽³⁾ この生き生きとした〈かかわり合い〉を、阻害するものが人間の本性の中にあることにまなざしを向けることが本稿のテーマである。

方法としては、人間の「本性」とは何かを問い続け、精神分析的社会心理学者として、人間関係を探究したE. フロムの〈自由からの逃走〉という概念を中心に検討する。目的は、教育的関係がいかに危ういものであるか、脆いものであるかを見定めることにある。

1 精神分析家 E.フロムと「社会的性格」

E. フロム(1900-1980)は、ネオフロイト学派に分類される精神分析家である。フロムは、『愛するということ』⁽⁴⁾あるいは、『生きるということ』⁽⁵⁾という著作で、研究者以外の多くの人々にも知られている。しかし、これらの著作だけではフロムのほんの一部分しか、理解することはできない。フロムは、精神分析的社会心理学の創始者として、最も大きな意味を持っているのである。

精神医学は「〈人間関係の学〉にならなければならない」といったサリヴァンらとともに、フロムはフロイトの精神分析学を精神分析的社會心理学へと発展させた。以下の言葉に、フロムの考えを見て取ることができる。

「我々は、人間は本来社会的存在であると考え。フロイトのように、人間がまず自足したものであり、本能的欲求を満たすために、第二次的に他人を利用するようなものではないと考える。この意味で、個人心理学は、基本的に社会心理学であると考え。あるいは、サリヴァンの言葉を借りるなら、人間関係の心理学である。心理学の中心問題は、個人が世間とかかわる時のそれぞれのあり方の問題なのであって、個々の本能的『欲望』の充足や不充足の問題ではない。人間の本能的欲求についておこる問題は、人間のパーソナリティの問題そのものとしてではなく、人間の外界に対する関係という問題全体の一部として理解されなければならない。」⁽⁶⁾

フロムは、フロイトの心理学がリビドー論や、心的構造論に代表されるように個人の内部で完結したものであることに対して疑問を持ち、独自の学問を形成した。上記の引用に見られるように、フロムはサリヴァンに影響を受け、心理学を人間関係の学であると規定している。言い換えれば、フロムの理論は、〈かかわり合い〉の学であるといえる。

社会心理学の目的は、「集団に属する個人の心的構造の全体を理解することを主張するのではなくて、集団に属するものたちに共通の心的態度のみを理解しようとする」⁽⁷⁾ ことにあると考えたフロムは、個人と社会を繋ぐ「社会的性格(social character)」という概念を提唱した。

フロムの対象としたのは、個々の人間の内側にある心的状態ではなく、社会的規模の無意識、集団構成員に共通する「社会的性格」であった。「社会的性格」が、価値観と思考形式を伴った意識内容の変化のみならず、生産方法と社会秩序の変化を決定する重要な生産力であると考えた。

社会心理学を「社会過程の結果として、情熱や欲求や不安が、どのように変化し発展するのかを示すだけでなく、このように特殊な形となったエネルギーが、今度は逆に、どのように生産的な力となって社会過程を作っていくのかも示さなければならない」⁽⁸⁾ 学問として、フロムは規定した。そして、社会過程は、心理的、経済的、イデオロギー的要素の交互作用であるから、このうちの心理的要素がいかに働いているかを問題とするのが社会心理学であると考えた。

フロムは、すべてのイデオロギー的現象が、経済的下部構造に依存するというマルクスとエンゲルスの考え方を精神分析的な社会心理学に導入した。つまり、社会の経済的状況が、その他の社会的、政治的状況と相俟って、その社会に特有で、平均的な「性格特性」を条件づける。そして形成された「社会的性格」は、その社会の思想や理想、イデオロギーの生産力となり、社会を方向づけるという循環を論じた。図に示せば、図1のようになる。



図1

フロムはマルクスの「上部構造」「下部構造」という考え方に、「社会的性格」という概念を加えることで、パラダイム転換を図ったとあって良いだろう。つまり、社会構造を二項から三項で説明したというだけでなく、構造の中に揺らぎの要素を組み込んだのである。人間の本性とは何かを問い続けたフロムの理論は、〈かかわり合い〉のメカニズムが、生産的手段の領有関係という経済構造に依拠しているのではなく、そこには「社会的性格」

という人間性の根源的状况と条件に依拠した集団の心性が働いていることを強調したものである。

フロムは、敬虔なユダヤ人の家庭に生まれた。両親ともにラビの家系の出身で、中でも父方の曾祖父ゼーリッヒマン・ベール・バームベルガーは〈ヴェルツブルグのラビ〉として高名な人物であった。ユダヤ教的な雰囲気の中で育ったフロムは、ハイデルベルグ大学に行き⁽⁹⁾ 社会学と心理学と哲学を学んだ。マックス・ウェーバーの弟アルフレート・ウェーバーに社会学的思考を学ぶ一方、ラビのラビニコブからもユダヤ教についての指導を受けていた。これらの成果の集大成である学位論文で、フロムはユダヤのおきての研究を基に、集団に共通のエートス形式が、集団に属する人々が同じように考え、感じ、行動するようになるような生活実践を要請することを解明していた。そして、社会集団の生活機能の連続性と内的首尾一貫性を保証し、ある一定の階級あるいは集団の人間を結びつける〈接着剤〉として「社会的性格」という方法概念を作り出したのである。

「イデオロギーと文化は、全体として社会的性格に根を降ろしているということ、社会的性格自身は、与えられた社会の存在様式によって形作られるということ、そして、主たる性格特性がまた、社会的過程をつくる生産力となるということ」⁽¹⁰⁾ このように説明し、「社会的性格」が社会における生産力であり、また逆に社会の独自性によって「社会的性格」が条件づけられることを主張した。

教育と「社会的性格」との関係について、「教育的技術は特定の社会的性格の原因ではないが、性格を形成する一つのメカニズムを構成する。」⁽¹¹⁾ とフロムは述べ、教育が「社会的性格」を形成する役割をはたしていること、教育が社会の経済的構造に由来する必要性に規定されるといっている。教育を含めた人間の社会的行動を分析するには、「社会的性格」を明らかにしなければならない。また社会の心的構造を問うことなしには、精神分析的な社会心理学は成り立たないことになるのである。

2 <自由からの逃走>

フロムの初めての著作『自由からの逃走』⁽¹²⁾ は、1941年に刊行された。第2次世界大戦という時代背景から、フロムの問題意識は、ファシズムの力を征服するために、社会心理学者として、全体主義がなぜ自由から逃避するのかを解明することにあつたことは確かである。

フロムは目の前のファシズムの台頭を、〈自由からの逃走〉の社会過程と捉えた。第一次世界大戦後、古い君主政治から新しいデモクラシーにかわって、人々は自由を手にいれた筈なのに、またしても新しい組織に服従しはじめたのは何故かという問いをたてた。そ

して、＜自由からの逃走＞という社会過程に働く心理的要素を検討した。

その結果以下の3点が明らかにされた。

1. 「自由を求める欲求」と「服従を求める欲求」という拮抗する欲求が働いており、これらの相反する欲求は、社会過程において「生理的欲求」と同様に、満たさなければならぬ人間の本性に基づいた「生の欲求」であることが明らかとなった。
2. 自由には二面性があり、＜自由からの逃走 (from freedom)＞と＜自由への逃走 (for freedom)＞のメカニズムがある。
3. ＜自由からの逃走 (from freedom)＞を＜自由への逃走 (for freedom)＞にするためには生産的性格による自己実現が必要である。

以上のフロムの成果を基に、自由の意味を問い、＜自由からの逃走＞という人間の＜かかわり合い＞のあり方を解明することは、歴史的なプロセスから発達のプロセスへの提言ともなる。また、時代を越えた人間の持つ傾性として＜かかわり合い＞論に示唆するところがあると考える。

そこで、以上の3点を順番により詳しく見ていくことにする。

3 人間の本性に基づく「生の欲求」

フロムの著作のタイトルともなった＜自由からの逃走＞という概念は、人間が「外界と関係を結ぼうとする欲求、孤独を避けようとする欲求」⁽¹³⁾を「生の欲求 (existential need)」⁽¹⁴⁾として持つ＜かかわり合い＞の動物であるために生ずる、「生の矛盾 (existential dichotomy)」である。⁽¹⁵⁾

「人間の本性 (human nature)」、すなわち人類の特性としての人間性は、フロムにとって「人間の科学」の研究対象であり、彼の理論の基礎概念である。

フロムは、人間の本性は「人間の存在を特徴づけ、失われた本能と自意識の二分法に根ざしている基本的な矛盾によってのみ定義できる」⁽¹⁶⁾といている。人間は、他の動物と比較して極度に弱い生物として生まれ、生得的には環境に適応する本能的な機制をほとんど身につけていない。エリクソンが人間の「脆弱さ (vulnerability)」⁽¹⁷⁾と呼んだ、この人間の本質を、フロムは人間の「生物としての弱さ」⁽¹⁸⁾と名付けた。この「生物としての弱さ」ゆえに、人間は生まれたときから他の人の助けなしには生きていけない。また他の人間や自然の脅威から自分を守るためにも、働いたり生産するためにも、他の人との共同が必要なのである。一方、自己意識は、自分を自然や他人とは違ったものとして意識させ、時間意識や死の意識をもたらす。この意識によって人間は自分の無力さ、無意味さ

を意識させられ、自分の人生に意味と方向を与えてくれるような組織に帰属することを求める。したがって、「外界と関係を結ぼうとする欲求、孤独を避けようとする欲求」は、人間の本性によって生み出されるものである。

また人間は「生物としての弱さ」ゆえに、社会に適応していくために、その都度自分の潜在的能力を発現していかなければならない。フロムによれば人間には生得的な心理的性質として、「成長しようとする傾向」⁽¹⁹⁾がある。この成長しようとする傾向は、人間という有機体の阻害されない発達の根底的条件である「自由」を求める願望を生み出す。

社会過程に働く、「自由を求める欲求」⁽²⁰⁾と「服従、帰属をもとめる欲求」⁽²¹⁾はともに「人間の本性」に基づく「生の欲求」であるといえる。まず、個体発生の観点から2つの欲求について検討してみる。

人間は、本能的に決定された行動様式を持っていないために、生まれたときから他の動物よりも長い期間周囲の大人に依存している。この母子関係に代表される一次的な絆が次第にたちきられるにつれて、ラカンの言葉を借りるならば「想像界」から「象徴界」に移行していくプロセスとなるが、この過程で自由を欲し独立していくのである。生物学的弱さを克服し、強くなって行く過程は、人間的な諸力を成長させ、自我が成長して自立していく過程である。フロムは、この自立の過程を「個性化(individuation)」が進められていく過程であると述べている。⁽²²⁾ 言い替えるなら、個性化し、自由になる過程は、個人のパーソナリティが力を獲得し完成していく過程であると同時に、他者と一体となっていた原初的な同一性が失われ、子どもが他者からますます分離していく過程である。分離が進む結果、孤独になり解消し難い困難や矛盾に直面せざるを得なくなる。

個体の発達について、個性化の持つ自由と孤独の両義性を見てきたが、同じことが系統発生的な人間の発達の歴史についてもいえる。下等な動物ほど自然への適応過程が本能により決定されているが、人間のように発達した動物ほど行動様式が遺伝的なメカニズムに固定されなくなり、自己決定の可能性を持ち、自由である。ここでいう自由とは「……からの自由(from freedom)」という消極的な意味であり、「……への自由(for freedom)」という積極的な意味ではない。行動が、本能に決定されることからの自由である。

自己決定の可能性を持つ人間は、様々の行動方針を選択しなければならない。自然に対する働きかけも、道具を造りだし能動的になり、自然を征服し自然から離れていく。系統発生的に考えても、個性化は自然からの自立に他ならない。個性化の過程を推し進め、経済的、社会的、政治的条件を整えていくが、しかし、まさに個性化の過程を推し進める経済的、社会的、政治的条件が社会化・集団化という個性化を妨げることになる。人間は、自由に疑惑を持ち、このような自由から逃れ、不安を解消してくれるような結合をしようとする傾向が生まれる。

個体の発達から見ても、人類の歴史から考えても、自由の発達過程には2つの矛盾する傾向がある。自由になるということは、人間が自立的、独立的、批判的に成ることであり、一方ではより孤立し、孤独で恐怖に満ちた存在と成ることである。後者のような自由の否定的側面に、すなわち自由がもたらす重荷についての理解をフロムは主張している。

人間は、個性化の過程でより自立し自由になるが、自由の否定的側面を十分に理解するには至らない。なぜならそれは、本質的には外的な束縛ではなく、パーソナリティの自由を十分に実現することを妨げる内面的な要素だからである。例えば、現代の我々は言論の自由が保証された社会に生きていることを疑わない。しかし、自分の話していることは、他の人々と同じようなことではないだろうか。本当に自分自身で考える能力を持っていると言えるだろうか。フロムは、我々が「世論」や「常識」などの匿名の権威の拘束的役割を見落としていることを指摘している。

4 逃避のメカニズム

人間が自由になると、その反面自由の重荷も背負わなければならなくなることを理解した。〈自由からの逃走〉という概念を理解するための次の課題は、自由の否定的側面がおよぼす影響を、フロムの理論から検討することである。

本質的に、人間が本能的決定性から自由な動物である、すなわち消極的自由を持つ動物であるゆえに、人間は自分で自分を規定し形成しなければならない存在である。つまり、人間は「自己実現」(self realization)しなければならない存在なのである。

人間は、自立し自由になるにつれ、解消しがたい矛盾に直面し無力感や孤独感にさいなまれる。このような状況を脱する道は2つあるとフロムは考えた。1つは「積極的自由」へと進むことができる道であり、もう1つは人間を後退させ、服従により自由を捨てさせる逃避の道である。

前者は、「生産的な方法」であり、個性を放棄することなく個人を世界に結びつける関係である。「人間が、強さと生産性を持っていれば、他者との新しい親密性と連帯性が生まれるであろう。この内面的強さと生産性は、外界との新しい関係が成り立つための前提である。」⁽²³⁾と述べている。ここで注目すべき言葉は、「生産性」である。この点に関しては、フロムが「生産的性格(productive character)」⁽²³⁾とよぶ〈かかわり合い〉の仕方についての検討が必要である。後に詳述することにする。

後者は、〈自由からの逃走〉である。これは、耐え難い状態からの逃避にすぎず、不安をやわらげ、恐怖を避けることはできるが、根底にある問題を解決することはできない。逃避のメカニズムをフロムは以下のように説明している。

- (1)マゾヒズム的傾向であり外側の力に服従し、自分を傷つけさげすむ。
- (2)サディズム的傾向として、他人を自己に依存させ道具化する、物象化する傾向、つまり他人を完全に支配する。

マゾヒズム的傾向もサディズム的傾向も、一つの根本的な欲求の表われである。すなわち、共に耐え難い無力感と孤独感から個人を逃れさせようとするものである。言い替えれば自由の重荷から逃げることを目的とし、お互いに依存しあうように一体化することであり、フロムは「共棲 (symbiosis)」⁽²⁴⁾ と呼んだ。これは、非生産的な〈かかわり合い〉である。マゾヒズム的人間もサディズム的人間も、必要とするのは支配、非支配の対象であり、エリクソンの言うところの相互性(mutual activation)⁽²⁵⁾ の他者ではない。

他人との共棲的關係に入ろうとするのは、自己自身の孤独感に絶えられないからであり、マゾヒズム的傾向もサディズム的傾向も共に、ひとりの人間の中に能動的な面と受動的な面として混じりあって存在するのである。このような性格をフロムは、「権威主義的性格」⁽²⁶⁾ と名づけた。それは、権威に対し服従し、また自らが権威であろうとする性格だからである。

現代の人間は、見かけ上は自由で、権威からも開放されているかに思える。しかし、実際は「常識」や「科学」や「精神の健康」や「正常性」や、「世論」などの匿名の権威に支配されている。匿名の権威は、命令そのものも命令するものも目に見えず、認識できないものであるだけに、我々は自らが意志する個人であると錯覚している。実は、我々も匿名の権威に支配され、「権威主義的性格」により、〈積極的な自由から逃走〉しているのである。

5 〈自由への逃走〉と「生産的性格」

自由へと成長する過程が悪循環とならないで、独立的であり、自立的であり、批判的でありながら、孤立したり、孤独や恐怖に陥ることがない積極的な自由は、個性を放棄することなく個人を世界に結びつける方法により獲得される。〈積極的な自由への逃走〉という〈かかわり合い〉の方法を持つことで可能となる。フロムは、これは「自我を実現し、自分自身であることにより獲得できる。」⁽²⁷⁾ といっている。

「自分自身であること」、この言葉にはどのような意味が込められているのだろうか。フロムの言葉を繋ぎあわせると、次のような説明になる。自分自身であろう (to be himself) とすることは、自分自身になろうと努力すること (to be for himself) である。この努力は、自分が生物的な弱さである〈消極的な自由〉を自ら引受け、自分自身に潜在的に内在する能力に応答する (to respond) ことである。つまり自分自身への責任 (the respon-

sibility for himself)を引き受けることである。⁽²⁸⁾ フロムが自発的活動と呼んだ自らの意志で自由に活動することができるようになるための前提として、自分自身を受け入れることの必要性をフロムは主張している。したがって、「自己実現をする」ということは、自分自身への責任を引き受けることであり、自分自身の力を展開することにより、生産的に生きることである。

先に説明したように、このような〈かかわり合い〉のもちかたを、フロムは「生産的構え」、あるいは「生産的性格」と呼んだ。「生産的性格」は、人間が消極的自由と、自意識の二分法を受け入れて、自らの人生に意味を見出して生きていくための〈かかわり合い〉の仕方である。フロムの理論では、性格とは、世界に対する「関係の仕方 (a mode of relatedness)」⁽²⁹⁾ であり、「生産的性格」は、「社会的性格」の1つである。

ここで、フロムの「社会的性格」分類について述べ「生産的性格」についての理解を深めよう。フロムは性格類型を「生産的構え」、「非生産的構え」の2つに大別し、後者をさらに「受容的構え」、「搾取的構え」、「貯蓄的構え」、「市場的構え」の4つに分類した。⁽³⁰⁾ 「生産的構え」、つまり「生産的性格」は他人、自己およびあらゆるものに対する、〈かかわり合い〉の仕方を表している。生産的というのは、自己の力を用い、自分に備わった可能性を実現する能力のことである。「生産的性格」は、人が精神的情緒的に損なわれていないかぎり、誰でも持つことのできる態度である。

一方、「非生産的性格」は、非生産的活動を生み出す、不安に対する反応である。先に論じた〈自由からの逃走〉過程に表われた「権威主義的性格」は、この範疇のものである。つまり、自由になるに連れて、解消しがたい矛盾に直面したり、無力感や孤独感にさいなまれた時に、このような耐えがたい状況から逃避する〈自由からの逃走〉となるのである。言替えれば、自由の重荷から逃げることを目的とし、外側の力に服従し、自分を傷つけさげすむと同時に、他者を自己に依存させ道具化する〈かかわり合い〉のあり方である。〈自由からの逃走〉という〈かかわり合い〉のあり方は、支配、被支配の関係であり、相互物象化である。人間の持つ本性から、「自由を求める欲求」と「服従を求める欲求」というパラドキシカルな〈かかわり合い〉の欲求を生欲求として持っているが故に、〈自由からの逃走〉という物象化が生まれることを理解した。「生産的性格」よりも「非生産的性格」についての類型の方が詳細であることを考え合わせると、フロムがいかに人間の〈かかわり合い〉が危うく脆いものであるかを見据えていたか、推察することができる。⁽³¹⁾

「生産性」は、人間の完結性と孤立性とを同時に維持するというパラドックスに答えるものであるために、「生産的性格」が積極的な自由をもたらすのである。つまり、「生産的性格」という「関係の仕方」に「より〈自由への逃走〉をすることができるのである。

おわりに

これまでのフロムの理論についての議論を要約してみる。

フロムは、人間の持つ本性は「失われた本能と、自意識の二分法に根ざしている」と規定している。そしてこのような本性のために、人間は「生の欲求」として、「外界と関係を結ぼうという欲求」つまり〈かかわり合い〉の欲求を持つ。〈かかわり合い〉の欲求は、「自由を求める欲求」と「服従を求める欲求」というパラドキシカルな欲求からなっている。この欲求にいかに対応するかは、「世界に対する関係の仕方」つまり〈かかわり合い〉の方法として形成された「社会的性格」によるとフロムは説明している。いかなる「社会的性格」で対応するかにより、〈自由からの逃走〉になるか、〈自由への逃走〉になるかが決まるのである。

フロムは、性格類型を「生産的性格」、「非生産的性格」の2つに大別した。「生産的性格」は、人間の本性から生じる完結性と孤立性というパラドキシカルな欲求両方に答える〈かかわり合い〉のあり方である。そして、積極的な自由をもたらす〈自由への逃走〉という〈生き生きとしたかかわり合い〉のあり方に人間を導く社会的心性である。

一方、「非生産的性格」は、非生産的活動を生み出す不安に対する反応であり、〈自由からの逃走〉をもたらす。以上の内容が、フロムの理論から明らかになった。

本稿の目的は、人間の本性が持つ〈かかわり合い〉のあり方を明らかにし、教育のあり方を問いなおすことにあった。フロムの理論から、「教育的関係」の前提である人と人との〈かかわり合い〉が、常に〈かかわり合い〉の不全を起こす傾向を孕んだものであることが明らかとなり、「教育的関係」の脆さ、危うさを理解した。つまり、教育の自明の前提とされている教育者と被教育者の関係も、相互形成するような〈生き生きとしたかかわり合い〉として成立することの難しさを痛感させられた。そして、「教育的関係」を阻害するものが、人間の本性の中にあることにまなざしを向けることの必要性を迫られた。これらの結論を真摯に受け止め、教育について議論していかなければならない。

次の課題は、これまでの議論を基に、学校のあり方を捉え直すことである。現代の社会は学校化社会である。「教育的関係」が阻害されていれば、その関係のあり方は、学校の外の〈かかわり合い〉においても再生産されると考えられる。この点を検討することが、教育学に向けられた課題だと考える。フロムの理論から〈かかわり合い〉不全の議論を、この課題に沿って要約してみよう。

〈かかわり合い〉不全は、人間の自由と責任ある応答性の問題であることを、フロムの〈自由からの逃走〉という概念から論じた。「人間の実存とは、そのつどの存在可能性であり、主体的投企、自由そのものである。したがって、人間は自ら存在するところのものに対

して、神に代わって、全責任をもたなければならない⁽³²⁾ 存在である。主体が自由であるために、不可避免的に自己に束縛されるということ、また、自由も責任も放棄し、ハイデッカーの「頹落」の示すように、「人という匿名の存在に自らを委ねてしまっている状態」に在れば、群集心理のファッション性も生み出すという、このような自由の意味するところを学びとることに、教育は何をなすことができるか。これらの自由と〈かかわり合い〉の持つ否定的側面は、教育学に何を示唆するのか。

現代の学校教育は、「近代合理的な知識と論理の獲得競争の場」となっており、「自分自身であることを実感する自他の人間形成にかかわる実在感」⁽³³⁾ を感じとる場ではない。つまり、フロムの強調した「自我を実現し、自分自身であること」を学校教育そのものが阻んでいるのである。その結果「生産的性格」による〈自由への逃走〉という〈かかわり合い〉のあり方は獲得できない。学校教育のあり方そのものが、〈かかわり合い〉不全を引き起こす一つの原因となっていると考える。

学校教育のあり方が「近代合理的な知識と論理の獲得競争の場」から、「自我を実現し、自分自身であること」が実感されるような場に変換されることにより、教育者と被教育者の関係がより生産的なものへと変容することを目指さなければならない。そしてこのような「教育的関係」が、学校化社会において学校という場の周辺にある〈かかわり合い〉を、生き生きとしたものへと改善していくことに繋がるのではないだろうか。このあたりに、「教育問題」を解く1つの鍵が潜んでいると考える。

注

1) 日本教育学会第57回大会公開シンポジウム(1998年8月29日 香川大学において)での議論。

2) 日本教育学会第57回大会シンポジウム・課題研究発表要旨集録、p.6。

3) エリクソンの〈vital involvement〉という概念を基に、教育を異世代間の相互形成として考える。

鬢櫛久美子、「エリクソンの〈vital involvement〉と異世代間の相互形成」、『名古屋柳城短期大学研究紀要』第19号、1997年、pp.101-116に詳しく論じた。

4) Fromm, *Art of Loving*, Harper & Brothers, 1956,(『愛するということ』鈴木晶訳、紀伊国屋書店、1991年。)

5) Fromm, *To Have or To Be*, Harper & Row, 1976,(『生きるということ』佐野哲郎訳、紀伊国屋書店、1997年。)

6) Fromm, *Escape from Freedom*, Holt Rinehart & Winston,1941, p.290.

7) Fromm, *Eine psychoanalytische Studie zur sozialpsychologischen Funktion der Religion*, (Fromm,Gesamtausgabe Band VI, *Religion* Deutsche Verlags - Anstalt,1930a), s.16.

8) Fromm, *Escape from Freedom*, pp.13-14.

- 9) フロムは、1918年にフランクフルト大学に入学し、法律を2年間だけ学んだ。しかし、弁護士になることに魅力を感じることができなくなり、ハイデルベルク大学に行き社会学と心理学と哲学を勉強した。
- 10) Fromm, *Escape from Freedom*, p.296.
- 11) *ibid.*, p.286.
- 12) 『自由からの逃走』、日高六郎訳、東京創元社、1951年。(Fromm, *Escape from Freedom*の邦訳)
- 13) *ibid.*, p.19.
- 14) Fromm, *The Anatomy of Human Destructiveness*, Holt Rinehart & Winston, 1973, p.261.
- 15) Fromm, *Man for Himself*, Holt Rinehart & Winston, 1947, p.41.
- 16) Fromm, *The Anatomy of Human Destructiveness*, p.254.
- 17) E.H.Erikson, *The Life Cycle Completed*, W.W.Norton, 1982, p.31.
- 18) Fromm, *Man for Himself*, p.39.
- 19) Fromm, *Escape from Freedom*, p.287.
- 20) *ibid.*, p.288.
- 21) *ibid.*, p.30.
- 22) *ibid.*, p.28.
- 23) Fromm, *Man for Himself*, p.83.(アンダーラインは、筆者)
- 24) Fromm, *Escape from Freedom*, p.158.
- 25) エリクソンの理論において重要な概念である。詳しくは、鬘櫛久美子、「エリクソンの〈vital involvement〉と異世代間の相互形成」において論じた。
- 26) Fromm, *Escape from Freedom*, p.164.
- 27) *ibid.*, p.257.(アンダーラインは、筆者)
- 28) Fromm, *Man for Himself*, p.45.
- 29) *ibid.*, p.58.
- 30) *ibid.*, p.111.
- 31) フロムの「生産的性格」、「非生産的性格」という概念定義は、後に「バイオフィリア」、「ネクロフィリア」という二項に、そして「在ること (to be)」、「持つこと (to have)」という存在様式として展開された。
- 32) 和田修二、「実存における真理と自由—教育的世界の存在的考察 その2—」、『京都大学教育学部紀要』第7巻、1961年、pp.40-49. (p.41.)
- 33) 市村尚久、「個性教育の視点から」、『教育哲学研究』第59号、1989年、pp.1-4.